

「艦隊これくしょん」トリビュート掌編

ゴッド・ハズ・リジエクトッド

皆月蒼葉

《戦艦ゲームはやったことある?》

接続状態で古ぼけた青い安ソファにだらりと体を預けたまま、夕張が概念通話を五月雨に送る。それと同時に五月雨の疑似視界に白線が引かれ、16×16のグリッドが出現した。五月雨は概念通話に慣れていないらしく、ややあつてたどたどしい合成音声付き言語体が返ってくる。

「それならやったことあります。D・11」

五月雨の返答を受けて、グリッドのマスに柱状のテクスチャが出現した。同時に粗雑な長周期ノイズが響き、解像度の極めて低いプリミティブな文法で雷撃が演出される。二百年近く前から存在する二次元ポードゲームだ。

《波高し。ま、単純なゲームだよ。でもこれからやるのは違う》

言うのと、それまでのに次元的な空間は形を変え、グリッドを構成する線も種々多様な色を帯び始めた。各辺十分に大きい有限マス、11次元のグリッド空間。与えられた視覚情報に腹側皮質視覚路はパターン認識を試みるが、限度を超えた複雑さゆえ悲鳴を上げる。後頭葉を犯されたような感覚に陥り、五月雨は吐き気に顔をしかめた。

《探し出すのは戦艦じゃない。11次元を航行する冬寂》

「冬……駆逐艦ですか?」

五月雨の言葉に夕張は笑い、

《というよりは概念ね。ウインター・ミュート。実在はしないが、存在はする》

うちに消費された。時間差を伴う文字媒体も含めれば、戦争のコンテンツ化の嚆矢はさらに数百年は遡るだろう。

その醜い歴史の最果てが、ゲームフィクションによる「参加型」の戦争。ウィルソンが理想とは名ばかりの欠陥品を生みだしてから二百年あまり。彼の思惑とはまるで正反対に、世界はナシヨナリズムという名の怪物に食いもぎられた肉片の山と化している。大衆の不満はすべて「実存的異質者」へと向けられ、彼らはその排斥に熱を上げることで自らの無精と無聊を慰める。百年前から見られた構図ではあるが、そこに加わった新機軸がゲームフィクションだった。

《なんだっていいよ、今は。やるべきことだけ考えてればね》

夕張の声色がわずかに変わる。その小さな小さな非言語的变化は、はたして五月雨に届いているだろうか。

今や大衆はカウチに寝転んで映画を観たり、アローンにもたれかかってFPSを嗜んだりといった感覚で、実際の戦争にいつも気軽に参加する。仮想現実とは戦争の生々しい嗅覚を覆い隠し、精神的な障壁を取り去ったのだ。自宅にいながら戦争を「楽しむ」市民たち。実際に命を取られることも充分にあり得るが、超高解像度のCGと臨場感たっぷりのサウンドは凄惨な現実味をベールにかける。

「敵は冬寂だけですか?」

《だったら楽なだけだね。残念ながら》

答えながら、夕張は座標を指定して攻撃を仕掛ける。11次元の広大無辺な空間で敵を見いだすのは容易なことではないが、もし当たれば超高圧情報体が相手の脳を焼き切る——脳死だ。もちろん、その対象は相手だけではない。夕張や五月雨と同じ。巧妙に隠蔽されてこそいるが、死は確実に存在する。

と首をかしげる動作を試みる。しかし当然、無数のケーブルに接続された夕張の身体は、今や彼女の意志の支配下にはない。夕張は無意味に「次運動野のニューロンを発火させた——「首をかしげる」という指令を下したに過ぎなかった。

「分かりません。もうちよつと噛み砕いていただけると……」

困惑げにこぼす五月雨。夕張の生体チップはその音声を波形解析し、表情を再構築して視野左側に透過率40%で表示する。

《おとぎ話の登場人物よ。百年以上前のね。ま、冬寂がなんだろうと実際はどうだつていいの。なんだつたら冬寂の代わりにヒラヌマやシャルンホルストでも構わないわ。単なるマクガフィンね》

「マクガフィン? それも登場人物ですか?」

要領を得ないといった声色で五月雨が問いかけ、夕張はあははと笑った。発話を一字一句違えずにリッチな文字情報として相手に送信する言語体と異なり、夕張の用いている手段は概念通話だ。今ごろ五月雨には、夕張が「笑った」という事実のみが知らされているのだろう。既に分かりきったことではあるが、今さらになつてその齟齬がどうにもおかしくなり、夕張はまた別の笑いを表した。

《要はゲームフィクションなんだから、話のきっかけにさえなれば何でもいいのよ》

「それはそうですけど……」

ゲーム化された戦争。仮想空間技術と大衆ナシヨナリズム、両者の袋小路が生み出した人類史上最も醜悪な発明品だ。

大衆はあらゆるものをコンテンツとして消費する。戦争すら例外ではない。古くは百年以上前の地域紛争。原始的な機械に映し出されるリアルタイムの戦争映像は、それが一人称視点だったことも手伝つて熱狂の

「——当たり前のことなんですけど」

三十七回目の攻撃のさなか、五月雨が不安げに呟いた。夕張は視野左側の想像上の五月雨の顔をちらりと見る。

「これつて本物の戦争なんですすよね」

《……本当に当たり前のことね》

苦笑しながら、夕張は五十九回目の攻撃を行う。五月雨はしばらく無言のまま、動こうともしない。数千ミリセカンドほど経過して、さすがに夕張がたしなめようとした瞬間、五月雨が再び口を開いた。

「運が悪いと、死んじゃうんですすよね」

五月雨の視野右下に小型の映像画面がポップしている。東欧の小国のニュース映像。曇天の下、国旗に包まれた棺桶がゆっくりと埋葬されようとしていた。字幕はすべてキリル文字だが、舌状回をハックする翻訳ドライバによって、母語を読んでいるのと何も変わらない感覚で読むことができる。曰く、国内最年少、7歳の少年が自宅で戦死。

《仕方ないでしょ。戦争なんだし》

「でも……」

言いよどむ五月雨を見つめ、夕張は小さくため息をつく。身体行為を取つてみせた。そうして相手の目をまっすぐに見つめる——かつてであれば発言内容の重要性を伝える非言語的符号だったが、今は違う。言語野同士の直接伝達技術は、コミュニケーションの93%を駆逐してしまった。《確率で考えるのよ。戦争で死ぬ可能性があるといつても、その確率は限りなく低いわ。じゃあ戦争から逃げ出したら? 私たちは戦争に参加することでやつと食べていけるのよ。逃げ出した先に待ってるのは、100%確実な死じゃない》

言いながら夕張は眼前に広がる仮想空間を最小化し、実際の視界

を目に入れる。安物の建材を粗雑に組み上げただけのバラック。自らの寝転ぶソファからはバネが飛び出し、部屋の至る所に置かれたバケツには雨水が溜まっている。夕張は唇を噛もうとするが、その感覚を味わうことはできず、より一層歯がゆい気分に変われた。

戦争への参加動機はエンターテイメントだけに留まらない。百年続いた自由主義という名の妖怪の支配は、百年前にクルーグマンやピケティが案じたよりもさらに悪い状況を生み出した。各国のジニ係数は目も当てられない有様で、にもかかわらず失業率が軒並み低水準なのは、経済的な理由からやむなく戦争に参加する人間の多さゆえだ。戦争には報酬が付きものだから。

「もし、もし私たちが死んだら、そこに意味はあるんですか?」

ニュース映像に現れた号泣する女性。眺めながら五月雨が問うた。

《物語ならね。物語であれば、人の死には必ず意味があるはずよ。でも、これは現実だから》

夕張の答えに、五月雨は表情をいつそう暗くする。

《ほら、つまらないこと考えないで。報酬もらったらどうするかとか、そういうこと考えましょ。私は欲しいドライバがあるの!》

言い、百三十八回目の攻撃。仮想空間を再度視界に展開し、五月雨に被害のないことを確認する。

瞬間、周囲が激しいノイズに襲われた。視界は大きく歪み、自分や五月雨の悲鳴も金属音めいた雑音に変わる。

「な、なに!？」

狼狽する五月雨の声がころうじて聞き取れた。

《波高し!よ! まずいわ、座標転移しないと!》

叫ぶ間に二発目の攻撃が至近座標に繰り出され、夕張の声は轟音にか

き消される。

「ゆ、夕張さん!」

《大丈夫、落ち着いて!》

三発目の攻撃。猛攻によるノイズは視覚や聴覚だけでなく、侵襲型のチップにも悪影響を及ぼす。思考加速素子と精神安定素子をやられた状態で、夕張は初めて動物的恐怖を覚えた。

怖い。

考えることができない。

どうすればいいのかわからない。

死にたくない。

思考は完全に停止していた。

「転移! まだですか!？」

間断ない轟音の隙間で五月雨の叫びが奇跡的にも明瞭に聞こえ、夕張ははっとした。転移!

《だ、だね! 今すぐ!》

冷静さを取り戻すと、叫びながら高次関数を生成し、自らの座標を代入する。数十ミリ秒と経たずに行列式は解決され、二人は終域座標へと移動した。

一瞬、視界が暗転し、存在が途切れたような気がした。

転移先。先ほどまでの猛烈なノイズは綺麗に消え去り、虚無の空間が平穏に広がっている。音はない。

夕張に身体感覚があるなら、今ごろ肩を落としてへたり込み、ため息の一つでもついていたのだろう。収まりの悪さを感じながら、とりあえず運動野のニューロンを発火させるだけ発火させた。

「夕張さん……」

今にも泣き出しそうな声が聞こえてきた。

《大丈夫、もう大丈夫だから……!》

優しく声をかけようとするが、概念通話ではその感情すら伝えられないことに気づいて歯がみする。当然、歯がみもできない。

「夕張さん、生きててよかった……!」

視野に移る演算された五月雨は、ぼろぼろと大粒の涙をこぼして震えていた。機械の想像とはいえ、実物も大差ないだろう。

もとより弱虫な子だった。優しい子でもあった。機械しか友達がいなかった夕張に初めて構ってくれたのも、他でもない五月雨だった。夕張 という名前をくれたのも。

《あはは。もし死んじゃったら、私のこと引張ってくれた?》

悪趣味だという自覚はあった。しかし、あえて口に出してしまうことで、感情を確かめたかった。自らの皮膚を切り血を見ることで生を確かめるかのように。なんと身体的な行為であることか。

彼女がくれた名前。スラムの片隅に落ちていた、百年も前の戦争を綴った本から取った名前。機械いじりが趣味の彼女にはびつたりの、暁の水平線に浮かぶ兵装実験艦の名前。

《ねえ——》

そこまで言って、夕張は概念通話をやめ、言語体へと切り替える。五月雨のそれとは異なる、機械的に生成された言語体。それでも、

「ねえ、五月雨ちゃん」

夕張の言葉に、初めて色が灯った。

「私ね、すごく嬉しかったんだ」

五月雨はきょとんとして夕張を見つめる。

「名前、くれたでしょ。すごく嬉しかった。あの時は「私が夕張なら

じゃああなたは五月雨だね」なんて冗談めかして言ったけど、五月雨ちゃんも五月雨で本当によかったって、今でも思う」

「どういうことですか?」

夕張は、頬を緩める指令を送りながら、続ける。

「私の最期を看取るだろう人が、五月雨ちゃんでもよかったって」

「……何言ってるんですか。夕張さんは死にませんよ」

五月雨の言葉に、夕張はしばらく黙りこくってから、

「だよね」

と笑ってみせた。

九十四分後。

11次元の仮想戦場から離脱した二人は、バラックの中でくつろいでいた。五月雨は非侵襲型のヘッドギアを外してソファに腰掛ける。本を読みながら、時おり夕張と会話を交わす。

夕張はソファに横たわったまま、無数のコードを外そうともしない。体を微動だにさせず、ただ眼球だけが動きを見せる。五月雨が声をかけると、接続された小型スピーカーから合成音声が続いてくる。

「やっぱ楽だし、楽しいんだけどさ」

夕張の音声に、五月雨は無言で相槌を打つ。その様子を、これも接続された全天球型のカメラが捉え、それを確認して夕張は続けた。

「肉、やっぱあった方がいいなって。戻そうかなあ。お金かかるけど」

「もう、だから言ったじゃないですか。リハビリ大変ですよ」

肉声と機械音声の笑い声が、むつまじく混ざり合った。